

# 彫刻家カール・プラントルをたずねて

柴田葵

(2008年11月30日初版掲載)

## 目次

みじかい旅のためのすこしながい **まえがき**

### 11月23日(日) 彫刻シンポジウムの生みの親、カール・プラントルの元を訪れる

- プラントル邸にて …5
- アトリエ内のゲストハウス …7

### 11月24日(月) ザンクト・マルガレーテンの丘で彫刻シンポジウムの原点に出会う

- プラントルのアトリエ空間
  - ・アトリエ …9
  - ・絵画収蔵庫 …11
  - ・彫刻の庭 …12
- Pöttsching …18
- St.Margarethen
  - ・ゲストハウス …21
  - ・マルガレーテンの丘の上へ …24

### 11月25日(火) オーストリア政府主催のプラントル氏授賞式に出席する

- プラントル氏授賞式と祝賀会 …29

### 11月26日(水) 滞在最後の日

- 追記 …31

## まえがき

「彫刻シンポジウム」Bildhauersymposionをご存知だろうか？

現代において「シンポジウム」と言えば通常、学術的な討論を含む研究会や会議を指すことになっている。「歴史学シンポジウム」とか「少子高齢化シンポジウム」といった具合で、大学や研究所などの学術・教育機関が実施するものが多い。言うまでもなく、古代ギリシアの「饗宴」Symposionに由来する言葉であるが、現代のシンポジウムにおいてはもはや、酒を酌み交わしたり、音楽に耳を傾けながら談笑するような場面はなくなっている。

では一方で、彫刻のシンポジウムとは何か？

しばしば誤解されるように、それは「彫刻の研究者・専門家による学術会議」であったり、「彫刻家による研究発表会」を意味するものではない。彫刻シンポジウムとは、古代ギリシアの饗宴の要素をより大きく継承しながら、彫刻家たちが一定期間作業場に集まり、寝食を共にしながら、同じ空間と経験を共有して作品制作を行う形態のことである。

彫刻シンポジウムは、しばしば「国際」彫刻シンポジウムの形を取って、国籍や流派を問わず、多様な彫刻家たちが一堂に会し、交流とインタラクションを深める機会を提供してきた。また、彫刻家たちの集まる場は多くの場合、石切り場や工場など作品の生成する現場であり、制作の過程は一般の人々に公開されるのが常である。制作された完成作品は、基本的には当該コミュニティの公共空間に設置され、地域に還元されることになる。

このように、社会に対する彫刻芸術のあり方を大きく変えることになった「彫刻シンポジウム」は、オーストリアの石彫家カール・プラントル Karl Prantl (1923-) によって生み出された。プラントルは1959年、ウィーンから60kmほど離れたザンクト・マルガレーテンの石切り場において、「ヨーロッパ彫刻家のシンポジオン」Symposion Europäischer Bildhauer という、世界最初の彫刻シンポジウムを実現した。プラントルの思想と試みは元来、冷戦下における東西対立の状況に対する異議申し立てが発端となったものであったが、「彫刻シンポジウム」の理念はその後国際的に伝播し、半世紀経った今では、世界各地でシンポジウムが定着・発展を見せるようになった。

さてこのように、彫刻シンポジウムの父と言われるプラントル氏を、この度オーストリアに尋ねることができるという、非常に幸運な機会に私は恵まれたのである。一体なぜそのようなチャンスが訪れたのか？ 事の発端と経緯は、実に偶然と突然の産物である。

まず今年2008年の夏頃、私の研究室の友人で、ドイツの文化政策について研究をしている女性が、ハノーヴァー在住の彫刻家で、ぜひともあなたに紹介したい人がいる、という

メールをくれた。それは、石彫家の藤原信氏であった。世界各地のシンポジウムに関わってきた藤原氏は、カール・プラントルとも大いに交友と面識があるという。さらに藤原氏は、普段はハノーヴァーとノルウェーにあるアトリエを拠点に活動しているが、ちょうどこの夏に来日の予定があるということだった。

彫刻シンポジウムを研究している私にとっては、まさに千載一遇の機会。私は彼女を通じて藤原氏と連絡を取り、彼が非常に快く承諾してくれたので、9月初旬に日本でお会いする約束を取り付けた。

そこで9月7日、藤原氏とその盟友である彫刻家の山本哲三氏、松村晃泰氏、それに彼女と私の5人が名古屋で面会する運びとなった。話は彼らがヨーロッパで経験してきた70年代のシンポジウムから、現在進行中のプロジェクトのことまで及んだ。

今年2008年11月、プラントル氏は85歳の誕生日を迎える。それを記念して、日本の彫刻家たちの手になるシンポジウムの記録集を編纂するプロジェクトが、藤原氏を代表として行われているということだった。彼らの人的ネットワークを利用し、できる限り多くの彫刻家たちに呼びかけて、自分がこれまでに参加したシンポジウムの記録を寄せてもらう。その記録を集成すれば、これまでほとんど大系だっただけでまとめられることのなかったシンポジウムの軌跡が見えてくるのではないか、というのがプロジェクトの趣旨だった。

私は研究者として、そのプロジェクトには大いに興味を示し、何らかの形で協力をした旨を伝えた(ただし、プロジェクト終了までの時間が残り少なかったので、実際には最後の校正にほんの少し関わり、小文を寄稿するにとどまったのだが)。今、研究対象として彫刻シンポジウムに一番関心を持っているので、こうして彫刻家たちの生の声や資料に接することができるのは本当にありがたい、と私は言った。すると、藤原さんが、

「そんなに興味があるんなら、カール・プラントルさんに会ってきたらどうですか？」

と言う。冗談だろうと私は思ったが、藤原さんは続けて、この冊子を今度の11月にプラントルさんに渡しに行かなければならないから、その時について来るといふのなら僕は全然構わない、というようなことを言った。それで、どうやら冗談ではないらしいという予感がしてきて、本当にご迷惑ではないのですか？そうでなければ・・・という、藤原さんの言葉はどんどんエスカレートしてきて、

「ぜひそうしなさい。プラントルさんのところへいらっしゃいよ」

「彫刻シンポウム、面白そうでしょう。やってみませんか？」

「君たちは論文を書くとか本を読むとか、そういうことばかりは得意だろうけれども、石を彫ったことないだろ。石を叩いてみなさいよ。

ノルウェーの石切り場に来たらどうですか」

とまあ、大変な話になってきた。しかし私の方はカール・プラントル氏に会うことがで

きるならば、日本での様々な仕事をある程度犠牲にしても、このチャンスを逃したくないと考えていたし、一度も石を彫ったことなどないので向こう見ずな限りだが、ノルウェーの石切り場に行ってみるのも興味深い体験だろうと思った（可哀相なのは、修士論文の提出を数ヶ月後に控えて、全く身動きが取れない我が友人であった）。そこで、私はとにかく11月にプラントル氏に会いに行くため渡欧したいという希望を強く伝えておいた。

それから先は、ドイツへ帰国した藤原さんがこまめにメールや国際電話での連絡をくれたおかげで順調に進んだ。関西の山本哲三氏・松村晃泰氏らの尽力によって、プロジェクトの成果冊子は10月末に完成し、プラントルさんの誕生日に合わせて1冊だけ先に送られていたが、追加の15冊を渡欧の際に彼に手渡してほしいと頼まれた。準備と手はずは既に万端整った。

そういうわけで私は2008年11月、オーストリアでカール・プラントルとその家族や仲間会い、彼のアトリエで寝泊りし、彫刻シンポジウムの原点であるザンクト・マルガレーテンの石切り場を訪れ、数々の石彫作品を目の当たりにし、さらにはプラントルの授賞式と祝賀会にも出席するという、類稀な機会を授かったのである。授賞式については、事前に藤原氏から聞いていたが、当然自分はその間留守番するものと思っていたので、向こうに着いて初めて「あなたもぜひ」と言われた時は、あまりに驚いてお断りしようとした。だが「何も遠慮することはない」と繰り返し諭されて、分不相応で厚かましくも、授賞式や祝賀会に参加させていただくことにした。いち外国人学生に過ぎない私を招いてくれたご厚意と寛大さには、感謝の言葉もないほどである。

おかげで私は、多くの人々に出会い、自分自身の目で歴史の蓄積と生成の現場を目撃することによって、世界の視野を大きく広げることができた。今回の渡航で何もかもお世話になった藤原信さん、滞在先で温かく迎えてくれたカール・プラントルさん、ウタ夫人には最大の感謝の意を表したいと思う。全員の名前を挙げることはできないが、お世話になった全ての人々にお礼を言いたい。

これは、その5日間の滞在の記録である。現段階では、写真中心のルポルタージュの域を出ないものであるが、いずれ何らかの形でまとめた文章に仕上げ、自分の研究の一部に結実させたいと考えている。

（写真：F印のものは藤原信氏撮影・無印のものは筆者撮影）

11月23日(日)

出発の日。

正午に成田空港を発ち、同日の16時頃ウィーン国際空港に到着。

ハノーヴァーから一足先にやってきた藤原信さん、  
ウィーンから迎えにきてくれた娘のカタリーナさん、

そしてニューヨークから来たコロンビア大学のYehuda E. Safaran氏らが待っていた。

カタリーナさんの運転する車で、空港から60キロほど離れた  
ブルゲンラント州 Pötsching のプラントル邸へ向かう。

## プラントル邸にて



(F)

はじめまして、  
カール・プラントルさん。  
お目にかかれて光栄です。

藤原さんが中心となって制作した、シンポジウムの記録集。  
カールさんの元にはすでに、  
11月5日のお誕生日に合わせて1冊だけ届けられていたが、  
追加の15冊を筆者が日本から持参した。



(F)

あらためて感慨深い様子で  
記録集に目を通すカールさん。  
向かって左が画家であるウタ夫人、  
右が同じく画家で娘のカタリーナさん。

この晩は、元町長のイレーネさんも  
 加わって皆で食事をした。  
 イレーネさんはプラントル芸術の  
 よき理解者、支援者である。



(F)

筆者が日本から持参した、  
 1963年の「世界近代彫刻シンポジウム」のアルバムを回覧しているところ。  
 これは日本最初のシンポジウムで、朝日新聞社が世界の著名な彫刻家を招待したのだが、  
 カール・プラントルのところには全く声がかからなかったようだ。  
 いわく、「しょっちゅう半パンにサンダル姿で、  
 ネクタイも締めないような彫刻家は呼ばれなかったんじゃないかな」。



プラントルさんがサインを入れてくれた図録。

*Symposion Europäischer Bildhauer 1959*

および

*Karl Prantl: Grosse Stein und Bildhauersymposien*



プラントルの息子セバスチャンは、  
 ウィーンで活躍するコンテンポラリー・ダンサー。

右はそのスタジオのパンフレット。

左のCDは、彼の妻でピアニストのチェチリア・リーが演奏した、サティのピアノ曲。



## アトリエ内のゲストハウス

プラントルさんの元には、世界中から多くの芸術家たちが訪れるため、アトリエ内にはゲストハウスが設置されている。滞在中は、自宅から 100m ほど離れたこのアトリエに泊めていただいた。



(ゲストハウスの外観)



部屋の内部。

カタリーナさんの手がけたドローイングや、現代風の屏風などが飾られている。



芸術に関する書籍が詰まった本棚。  
陽だまりのように暖かいヒーターの傍らで、手に取っては読む。



朝が近づいてきた。透き通った青い光が美しい。  
ジェームズ・タレルの「光の館」を思い出す。

11月24日(月)

この日は午前中、プラントルのアトリエと彫刻の庭を見学した。  
午後はず、Pöttsching の村内に設置された数々の彫刻を、ウタ夫人に案内していただく。  
そして藤原さんの運転する車で、Pöttsching から 20km ほど離れた  
ザンクト・マルガレーテンの丘へ向かい、  
彫刻シンポジウムの原点と現状をこの目で確かめた。

## アトリエ



アトリエの全貌。

中央に2階建のアトリエ、向かって右が絵画作品の収蔵庫、左が倉庫兼ゲストハウス。





制作の場となるアトリエの1階内部。



アトリエの地下。ここにも食堂・台所・バスルームが備え付けられている。



地下からの外の眺め．緑のアプローチが目に見える．



畳の上に飾られたカール・プラントルの小品．  
小さな彫刻作品をどのように展示すべきかと模索した末、  
このような展示方法を思いついたということである．

---

## 絵画収蔵庫



ウタ夫人の絵画作品が保管されている収蔵庫。  
シンプルだが意表を衝くこの建築自体が、一つの芸術作品ではないだろうか。

## 彫刻の庭

カール・プラントルのアトリエの裏には、幅数 10m・長さ 1km にも及ぶであろう、  
広大な彫刻の庭が広がっている。

この庭には、プラントルがこれまで手がけてきた石彫作品やその原型も含めて、  
大小 200 点を超えと思われる作品が展示されている。

この彫刻庭園のあまりの美しさと、日本では思いも及ばないようなスケールに、  
筆者は大きな衝撃を受けた。

今回訪れた時は、幻想的な一面の雪景色だったが、  
周囲の土地は他の農家が所有する畑なので、  
夏になると背の高いとうもろこし畑に囲まれた風景になるらしい。  
村人たちの結婚式も、よくここで行われているようだ。

彫刻のユートピアを思わせるようなこの庭園を、  
時間をかけてゆっくりと歩いてみた。



(右) Ei, 1985-92



1958年の「境界石」の原型。



動物が通ったと思しき足跡。筆者もこの先で鹿に遭遇した。



ブランドル氏は、1991年の小豆島彫刻シンポジウムに参加したことがある。その際、福田八幡神社に作品「瞑想の石」を設置しようとしたのだが、境内にあった遊具を撤去したところ、写真のような石碑が2本出てきた。それをどうするかという話になって、結局、ブランドル氏が引き取ることが決まった。ウタ夫人は、日本からオーストリアまでこんな大きな石を送ったら、一体どれだけ送料がかかるのだろうとハラハラしていたが、なぜか安く済んだのでホッとしたりしい。



*Zwei Steine zur Meditation, 1983-86*



(左) *Abessinischer Rosenkranz, 1992-95*



(左) 打ち捨てられた石材は彫刻家に拾われて、ここで再生を待つ。



(右・左) *Kugel*, 1986-97



(左) *Ikonostase*, 1976-86



このように筋の入った石材は、工業用には適さず廃棄されてしまうが、プラントルは石の持つ筋やひびなどの表情を、巧みに作品に生かす。



(右) Ring, 1995/96





(右・左) *Taufstein*, 1994-99





*Stein zur Meditation, Engel, 1987-88*

## Pöttsching



プラントルさんの暮らす Pöttsching の村には、彼の意向や元町長イレーネさんの努力により、元来ザンクト・マルガレーテンの丘に設置されていた作品のいくつかが移設されている。その現状をウタ夫人に案内してもらった。



Pöttsching の村は、素朴で美しい自然に恵まれている。青く美しい山並みを臨んで。



カール・プラントルが、1956年のハンガリー動乱後の1958年、オーストリアとハンガリーの国境に設置した「境界石」。ザンクト・マルガレーテンにおける彫刻シンポジウムの原点となった、記念碑的作品。



左 : Jacques Moeschal

中央 : Erich Reischke

右 : Maria Bijan-Bilger



Rolf Jörres



Makoto Fujiwara

「この公園の入口に置かれているのは、僕が随分昔に手がけた彫刻だな」(藤原氏)



ナチス・ドイツの歴史の爪痕を今に伝えるモニュメント。  
ナチスはニュルンベルクの石切職人に命じて、手彫りによる7万枚の敷石を作らせ、  
その上を軍隊が行進したのである。  
ここに並べられた3枚のタイルは、戦争と圧制の痛ましい記憶を物語っている。



Pöttsching の村の教会付近には、カール・プラントルの名前を冠した石彫公園が、  
町長の尽力によるもの。

## St.Margarethen



ザンクト・マルガレーテンは、  
古代ローマ時代からの歴史を有する、  
石灰砂岩の石切り場である。  
1959年に最初の彫刻シンポジウムが行われた場所だ。  
マルガレーテンの丘への入口には、  
切り出された石塊が並べられている。

---

## ゲストハウス



丘の麓には、  
シンポジウムに参加する彫刻家たちのためのゲストハウスがある。



ゲストハウス外観。  
存在感のある庇や、各扉の青色の格子がアクセントとなっている。



ゲストハウスの内部 .

シンポジウムは主に夏のバカンス期に行われることが多いため、  
この建物は基本的に夏仕様につくられている .



シンポジウムに集った彫刻家たちが  
共同生活を営むことができるよう、  
ベッドのある個室・食堂・台所・バスルームなども完備されているのだが・・・

「実は、この施設はもう何年も使われておらず問題になっている。  
有効に活用していくのが今後の課題」(藤原氏)。



## マルガレーテンの丘の上へ



坂道を登りながら丘を登ってゆくと、  
1959年のシンポジウム以来蓄積されてきた、  
様々な彫刻作品が設置されている様子を見ることができる。





漢字の「子」の字を象った、飯田善国の作品(1961)。

「私の頭蓋の中の暗闇にとつぜん閃いたのは、子供のイメージであり、  
子供を意味する漢字の「子」の字であった。

…その石彫は、同じ石切場で彫りつづけた  
他のヨーロッパ人の現代彫刻のどの作品と比べても、  
すこしも見劣りしないモダンさと単純さと力強さを持っていた」

(飯田善国『彫刻家：創造への出発』岩波書店、1991)



(F)

いずれも Herbert Baumann の作品．石彫の量塊感とスケールに圧倒される．



Herbert Baumann



(左) Karl Prantl 「ヨーゼフ・マティアス・ハウアーのための石」.

(右) Barna von Sartory



吾妻兼治郎の作品 .



丘の頂上には戦没者のためのメモリアルがあった .  
この場所から、オーストリアとハンガリーにまたがる広大な湖、  
ノイジードラー湖を臨むことができる .



石切り場の全景 .

ザンクト・マルガレーテンの丘は、  
彫刻シンポジウムだけの場所ではない。  
1926 年以來、キリストの受難を主題とした  
野外演劇が、継続的に行われてきている。



野外劇場ではオペラの上演も行われており、  
この時は「リゴレット」のポスターが出ていた。  
筆者も 2005 年にここで上演された「カルメン」を DVD で観たことがある。

もっとも、それらは年々大規模になってきていて、  
シンポジウムの彫刻作品との共存をはかる上で多くの問題があるという。  
藤原さんのお話では、数年前にこの野外劇場で「アイダ」をやったとき、  
舞台演出に使われる象が石彫作品の間を闊歩するので（！）  
彫刻が倒壊しないように保護器具を付けて回る必要があったとか。  
信じられないような話だ。



Japaniche Rinne, 1970

1970年のザンクト・マルガレーテンにおいて、  
広瀬孝夫・藤原信・庄司達・山口牧生・山本哲三ら  
5人の日本人彫刻家が、  
これまでとは全く新しい境地を開くべく、  
石切り場に全長60mもの「溝」を共同制作したもの。  
一つながりではなく、途中で何箇所か途切れているが、  
「断即是続」、点線状の溝はダイナミックに  
石切り場を横断している。

11月25日(火)

## 授賞式・祝賀会



(F)

カールさんが今回受賞したのは、  
オーストリア政府による「Staats Preis」。  
受賞おめでとうございます。

車に乗って1時間ほどでウィーンへ。  
授賞式が行われたのは、  
ブルク劇場(写真)付近の  
オーストリア文部科学省。



授賞式、文部科学省のサロンにて。  
国内外の著名な芸術家・建築家・実業家・文化行政官らが集う。  
シュミット文部科学大臣より賞が手渡された。  
来賓スピーチの合間には、チェチャーリア・リーがピアノ演奏を披露。



(F)

政府主催のレセプションの後は、  
ウィーン市内のギャラリーUlysses で開かれている、プラントル個展会場へ移動。  
作品を前に歓談する人々。



プラントル作品の熱心なコレクターである実業家のレンツ氏が、  
お祝いの晩餐会を設けてくれた。ウィーン随一の名店 Plachutta にて、  
女性客には一人一輪ずつバラの花が手渡された。レンツ氏の粋な取り計らいに感嘆。

藤原さんがプラントルに捧げるスピーチを読む。  
それに答えるプラントルさんは、  
「Stein zu Stein」(石から石へ)という言葉のところで  
感極まって泣き出していた。



翌朝の新聞 KURIE 紙に、  
プラントル氏の受賞を伝えるニュースが。

11月26日(水)

滞在最後の日。

23日の夕方にやって来て、26日の昼に帰っていくという、風の又三郎もびっくりの慌しい滞在であったが、プラントル夫妻に感謝と別れを告げて、ブルゲンラントを発つ。



ありがとう、さようなら、  
カールとウタさん。  
またいつかお会いしましょう。

ウィーン国際空港で藤原さんともお別れして、今回の旅はおしまい。  
本当にありがとうございました。

---

## 追記

今回の滞在で多くの有用な知見を得ることができたが、実は一つ、以前から気にかかっていたことで、プラントル夫妻に質問しても解決しなかった疑問がある。それは、彫刻シンポジウムの起源に関する問題なのだが、「1952年に Robert Roussil という彫刻家が、ウィーンの世界平和評議会でもシンポジウムのアイデアを提唱した」という主旨の記述が、1967年グルノーブルの彫刻シンポジウムに関する文献に記されているのである。

En 1952, lors du "Congrès pour la Paix" de Vienne, le jeune artiste Robert Roussil lance l'idée des Symposia. Dans un premier temps, les artistes sud-américains développent l'idée, suivis des européens.

( Ivan Bacon-Perroud. Marie Savine, *Un musée sans murs : Le premier Symposium français de sculpture Grenoble, été 1967*, Musée Dauphinois. Magasin / Centre national d'art contemporain, 1998 )

( 注釈 . グルノーブル彫刻シンポジウムとは、翌 1968 年のグルノーブル冬季五輪のプレ・イベントとして

行われたもので、フランスでは最初のシンポジウムに当たる。なお、上記の文献を紹介してくれたのは、研究室同期の長嶋由紀子さんと、グルノーブルの自治体文化政策史については彼女の修士論文に詳しい。）

Robert Roussil は 1925 年生まれのカナダの彫刻家で、木材を利用したトーテム・ポールの作品を手がける作家である。同書に収録されている作家プロフィールの「Robert Roussil」の項を参照すると、やはり同様の内容が書かれている。

En 1952, au Congrès de la Paix de Vienne, Roussil lance un appel à l'échange, très remarqué par artistes sud-américains. L'idée des Symposia est née.

(Ibid.)

1952 年ということは、最初の彫刻シンポジウムが行われた 1959 年よりも前ということになる。私はその点が気にかかり、1952 年の世界平和評議会の議事録にあたってみることにした。法政大学の大原社会問題研究所図書館が、英語版とフランス語版の記録を所蔵していたので参照することができた。

…のだが、残念かつ奇妙なことに、「彫刻家がシンポジウムの提案をした」という内容の記述は、記録集のどこにも見当たらなかったのである。そして Robert Roussil の名前自体も全く記されていない。なお、この世界平和評議会 (Congress of the Peoples for Peace, Congrès de la Paix) は、1952 年 12 月 12 日～19 日にかけてウィーンで開催され、世界 85 ヶ国から 1900 人以上の参加者を集めた会議である。

そこで、今回の滞在中にプラントル夫妻に上記のことを尋ねてみたのだが、結論としては、Robert Roussil のことは知っているが 1952 年の平和評議会でのことは知らないし、よって彼から影響を受けてシンポジウムを始めたわけではない、ということであった。

そういうわけで、平和評議会における Robert Roussil の発言については、結局いまだ事実関係が判然としない状態である。もし何かご存知の方がいたら、ぜひともご教示いただきたい。

(elplateroargen yahoo.co.jp スпам防止のため、送信時には を@に換えて下さい)

---

## 参考 URL

Karl Prantl	<a href="http://www.karlprantl.at/">http://www.karlprantl.at/</a>
Uta Peyrer	<a href="http://www.utapeyrer.at/">http://www.utapeyrer.at/</a>
Katharina Prantl	<a href="http://www.katharinaprantl.at/">http://www.katharinaprantl.at/</a>
Sebastian Prantl	<a href="http://www.tanzatelierwien.at/">http://www.tanzatelierwien.at/</a>
Makoto Fujiwara	<a href="http://www.makotofujiwara.de/">http://www.makotofujiwara.de/</a>